

Title	マプーチェ歴史伝承：トライゲン区（1）：ホセ・カディン・ピチュンが語る「平定」と土地闘争
Author(s)	千葉, 泉
Citation	大阪外国語大学論集. 23 p.41-p.66
Issue Date	2000-09-29
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79830">https://hdl.handle.net/11094/79830</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## マプーチェ歴史伝承：トライゲン区 (1) —ホセ・カディン・ピチュンが語る「平定」と土地闘争—

千 葉 泉

### **Testimonio histórico mapuche, Comuna de Traiguén (1) : "Pacificación" y lucha por la tierra contado por don José Cadín Pichún**

CHIBA Izumi

#### RESUMEN

Este trabajo es un testimonio contado por un mapuche acerca de la "Pacificación", ocurrida en la segunda mitad del siglo pasado, y de la lucha por la tierra que actualmente existe en el sur de Chile.

Don José Cadín Pichún es oriundo de la comunidad de Pangueco, y residente hasta hace poco tiempo en la comunidad de Temulemu ubicada en la comuna de Traiguén. En julio pasado, una treintena de familias de esta comunidad, incluso la de don José, consiguieron la posesión del fundo La Unión, ubicada en la parte norte de la misma comuna, donde se formó la nueva comunidad "La Unión Temulemu Grande".

Don José es "dungulmachife", personaje que sirve de "intérprete" a la machi, shamán mapuche. Además, es narrador de los acontecimientos antiguos en base a su rico conocimiento oral. Su esposa, doña Merejilda Huentelao, es la "lonko machi", máxima autoridad tradicional religiosa de la comunidad. Y su yerno, don Juan Pedro Huilipán, fue el que dirigió la reciente posesión del ex-fundo La Unión.

En su testimonio, se destacan algunos elementos que, desde la visión de don José, se constituyeron en elementos esenciales para conseguir la "recuperación" de la tierra.

Por una parte, reviste importancia el recuerdo de sus mayores, quienes le contaron sobre sus experiencias personales en la "Pacificación", acontecimiento que significó la pérdida de la mayor parte del "territorio" mapuche. Por otra parte, la educación "winka" (chillkatun, papeltun) de los jóvenes mapuches de la comunidad que significó dotarles de medios prácticos para llevar a cabo por vía "legal" esta meta. Y por último, se destaca la intervención de un personaje "winka" (don José Aylwin), quien les entregó "el plano definitivo", que sirvió de constancia para poder

justificar la toma de terreno.

También cuenta anécdotas en que figuran con connotación negativa algunos militares chilenos que fueron personajes "célebres" en el proceso de la "Pacificación" tales como : el coronel Cornelio Saavedra y el coronel Basilio Urrutia.

Sin embargo, don José también se refiere a algunos "winkas", dueños de fundo, para quienes personalmente había trabajado como empleado y mediero. El recuerdo que tiene de estos "terratenientes antiguos" está lleno de anécdotas humanitarias, lo que nos deja entrever una relación, en cierta medida, complementaria que habría existido entre los grandes propietarios y los comuneros adyacentes en otra época.

Sin embargo, según la opinión de su esposa, la machi doña Merejilda, la impresión que se tiene de las compañías forestales, sus nuevos vecinos, es distinta. Se rompió esta relación "complementaria", lo que constituiría uno de los factores desencadenantes del actual conflicto.

A la versión original que transcribe literalmente el testimonio de don José, que fue contado en mapudungun y en castellano, se agrega la traducción completa del mismo en japonés.

Le agradezco profundamente a don José Cadín Pichún, por haber compartido conmigo estos valiosos testimonios. Mi agradecimiento también se dirige a doña Merejilda Huentelao, "lonko machi" de Temulemu, por su testimonio. (Sólo una parte del cual alcanzó a salir en este artículo.) Mi otro agradecimiento es para don Juan Pedro Huilipán, lonko de la nueva comunidad de La Unión Temulemu Grande, por haberme permitido participar en la hermosa ceremonia de la fundación del rewe y el paliwe, permitiéndome así a compartir vivencias con personas que han sido protagonistas de una realidad actual en la Araucanía.

Por último, le agradezco a don Hilario Huirilef Barra, oriundo de Choll Choll y consejero de la Conadi, por ayudarme a entender algunas expresiones en mapudungun, y a mi esposa Sonia Riveros, quien colaboró en aclarar algunas expresiones en castellano.

## 1. 序

本稿は、チリの先住民マプーチェの過去と現在に関して、ある年輩のマプーチェ男性が語った証言である。

この証言を筆者に語ってくれたのは、当時年齢73歳のホセ・カディン・コニョナオ（写真）である。ホセは、チリ南部9地域のトライゲン区にある、昨年創設されたばかりの「新しい」共同体に住んでいる。「新しい先住民共同体」というと奇異に聞こえるかもしれない。だが、チリ南部の各地でここ数年来先住民の土地闘争が激化し、少数ながら実際に新しい土地を獲得するケースが出現しているのである。

ホセがもともと住んでいたのは、同じトライゲン区にあるテムレムという共同体であった。

このテムレムでも数年前に土地闘争が始まり、紆余曲折を経たのち、ホセの家族を含む約30家族が昨年(1999年)の7月、同区の北端に位置するあるファンド(大土地)の所有権を獲得したのである。

筆者がホセと知り合ったのは、4年前(1996年)の8月のことであった。民間医療の調査でたまたまテムレムに赴いた際、共同体の「筆頭シャーマン」であるホセの妻の話を聞く目的で自宅を訪れたのである。その頃は、こうした土地闘争の計画が進行中であることなどつゆ知らず、話の話題に登ることもなかった。

だが、昨年の夏(チリでは冬)チリを再び訪れた時、アラウカニニアの複数の場所で同時進行的に土地回復闘争が展開されていた。新聞やテレビが「マプーチェ紛争」と題してこの問題を扱い、「マプーチェ過激派による放火」、「警察隊との衝突」等センセーショナルなタイトルのニュースが連日のように報道されていた。

これらの報道ではしばしば、「外国人活動家」や「チリ人極左主義者」などの「外部分子」に「洗脳」された「少数の若者マプーチェ」が今回の紛争の張本人であるといった論調が観察された。つまりこの「紛争」の原因を、先住民たちの伝統的な意識とは異質の、外来イデオロギーによる操作に帰する考え方である。

そして、いくつかの新聞記事からテムレム共同体もこうした土地闘争の真っ直中にあるらしいことを知り、筆者はいささか緊張してホセたちに連絡を取ってみた。そして実際に再会して初めて、彼らがほんの1ヶ月ほど前にラ・ウニオンという800ヘクタールもの面積のファンドの所有権を獲得し、そこに移住したばかりであることを知ったのである。

そしてその驚きも醒めやらぬまま、筆者はその2日後に新しい共同体で行われた聖域敷設の儀礼に招待された。<sup>(1)</sup> 内輪だけでひそやかに執り行われたこの儀式に参加した30名ほどの人々の顔は、一様に喜びと達成感に満ちあふれていた。彼らの口からは「農場占拠」、「警察隊との衝突」、「連行と投獄」などのエピソードが語られ、今回の土地獲得が「非合法的な手段を排除しない形で進められたことがわかった。そして、それにも関わらず、「奪われていた土地を取り返した」「祖先たちの仇をとった」といった表現は、彼らが今回の土地獲得を「正義の履行」であると確信していることを示唆していた。

正直に告白すると、前述した報道の論調等による先入観もあって、このような形での土地獲得が本当に「正義」と言えるのだろうかという疑念が、この時全く筆者の脳裡をよぎらなかったといえば嘘になる。そこで、少なくともこのテムレムの場合について、今回の土地闘争に関するマプーチェ自身の認識をもう少し深く知りたいという欲求にかられた。

それで筆者は、この儀礼の二日後に再びホセの自宅を訪れた。新聞など第三者による情報ではなく、マプーチェたち自身の口から直接彼らの意見を聞きたい旨を伝え、ホセは快く応じてくれた。本稿の証言は、その時にホセが筆者に語った話の一部である。

ラ・ウニオンの土地獲得に際して闘争を指導した人物はフアン・ペドロ・ウィリパンといい、ホセの義理の甥に当たる人物である。筆者は彼とも4年前に知り合いになっていた。

またホセの妻メレヒルダ・ウェンテラオはマプーチェ語で「マチ machi」とよばれるシャーマンである。彼女はテムレムのみならず、トライゲン区の他の共同体や隣接するルマコ区の共同体に住む複数のマチを指導した長老格のマチで、「ロンコ・マチ(筆頭マチ)」とも呼ば

れている。つまり、共同体の中で最大の伝統的宗教権威を体現する人物といえる。フアン・ペドロの妹ジャケリンも伯母メレヒルダの指導を受けたマチの1人である。

そしてホセは、「筆頭マチ」である妻メレヒルダの「通訳 *dungulmachife*」、つまり儀礼中にマチに憑依した神格に話かけたり、神格が話す儀礼的なマプーチェ語のメッセージを通常のマプーチェ語やスペイン語で他の参加者に伝達する等の役割を果たす人物である。<sup>(2)</sup> またホセは、年輩のマプーチェたちから受け継いだ過去の歴史的事件に関する伝承や、「夢」を通じて「神」から与えられたメッセージなど、口伝の形で身につけた豊富な知識を持ち、さまざまな儀礼の際にこうした知識を若者たちに語る「語り部」の役割も果たしている。若いリーダーであるフアン・ペドロも伯父ホセの助言を尊重している。一方、学校教育を受けた経験はなく、読み書きも知らない。

このようにホセは今回の闘争の中心部に近いところに位置しながらも、伝統的なマプーチェの意識を十分に保持する年輩のマプーチェである。言い換えれば、新聞の論調にしばしば現れる「過激な外部分子」に洗脳された「若者マプーチェ」といった表現に当てはまるような人物ではない。もちろんホセはただ1名のマプーチェに過ぎないが、そういう意味で、今回の土地闘争の原因に関するマプーチェ自身の認識について考察する際、こうした人物の証言は示唆深いと思われる。

次節では、ホセの証言を理解するための一助として、テムレム地区における土地闘争のプロセスの概略を説明しておこう。

## 2. テムレムにおける土地剥奪の歴史と現状

マプーチェは、16世紀の中葉以来スペイン人による征服と植民の試みに対して長期にわたって軍事抵抗を繰り広げ、17世紀初頭にビオビオ川以南の地域について事実上の独立を回復するのに成功する。以後、植民地社会および独立以降のチリ・イスパノクリオーリョ社会から様々な政治・軍事的圧力や文化的影響を受けながらも<sup>(3)</sup>、ビオビオ川を実質的な境界線として19世紀後半に到るまで自律的な存在を保持した。

だがそのマプーチェにも、19世紀の後半には大きな転機が訪れる。19世紀の初頭にスペインから独立していたチリ国家が、農牧産品輸出の振興<sup>(4)</sup>と国土統合の推進をめざし、ビオビオ川からトルテン川にかけて存在していた独立的なマプーチェ領域を併合したのである。いわゆる「アラウカニアの平定」<sup>(5)</sup>（1862～83年）である。テムレムが位置するトライゲン地区にも1878年には軍事境界線が敷かれ、集落が建設された。

こうした実力による「占拠」に反対し、多くのマプーチェ集団が抵抗の闘いに立ち上がる<sup>(6)</sup>が、近代的な装備を備えたチリ共和国軍の侵攻の前に敗退してしまう。その結果、彼らはそれまで保有してきた領土の大部分を剥奪され、「近代化」を促進するべく導入されたヨーロッパ移民やチリ人移民に分配されたり、競売にかけられたりした。一方、マプーチェたちには少数の家族ごとに極めて狭い土地が「恩恵地 *tierra de merced*」と称して割り当てられた。<sup>(7)</sup> 今日存在する「共同体」はこうして人工的に作られたものである。

ところで、「恩恵地」の画定に際してチリ国家が適用した法制は、近代的な個人主義に基づく土地所有観念であった。平定後の先住民の土地所有を規定した1866年12月4日法の第5条は、先住民所有地の画定に際し、「少なくとも1年以上の実質的で連続的な保有が証明されないいかなる土地も無人地であり、国家の所有になるものと見なす」旨を規定している。<sup>(8)</sup>

しかし当時マプーチェたちが「自分たちの領域」と見なしていた空間の中には、「実質的で連続的な保有」にはあたらないような広大な土地が存在した。当時彼らにとって最も重要な経済活動であった家畜の放牧や植物採集のための土地、そして彼らの精神的世界を構成する原野、河川、丘陵等がそれである。

もともと基準が異なるのだから、マプーチェたちがこの種の土地に関する「合法的」な保有の事実を証明できないのは明らかである。こうして、マプーチェたちはそれまで領有してきた土地の大部分を「合法的」に剥奪されることになったのである。

まず第1に、「平定」戦争による混乱や「集住委員会」の作業の遅滞なども影響して、「恩恵地」の付与を受けられなかった先住民が3万人～4万人はいたと見積もられている。この数字は当時の推定マプーチェ人口のほぼ3分の1にあたる。<sup>(9)</sup> 第2に、「平定」によって約3000の共同体が創設されたが、これらの共同体の土地が占める「恩恵地」総面積は、それまで彼らが占有してきた領土のわずか6.39%に過ぎなかった。<sup>(10)</sup>

このように、「平定」によって極めて大規模な「第1の剥奪」が起こったのである。テムレム共同体の場合も、1884年に地区の首長であったアントニオ・ニリビルに与えられた920ヘクタールの「恩恵地」を起源としている。<sup>(11)</sup>

だが共同体の人々は、「ウィンカ winka」と彼らがよぶ非マプーチェ系住民が私有する隣接の大土地が、自分たちの祖先の「旧領地」であったという意識を今でも抱いている。新聞の紙面にもしばしば登場するサンタ・ロサ・デル・コルピやナンカウエ<sup>(12)</sup>、そして今回の土地奪取の対象となったラ・ウニオンなどのフンドなどがそれである。<sup>(13)</sup>

だが、マプーチェに対する土地剥奪行為は、「平定」時に実行されただけではない。

なぜなら、からくも認められたわずかな「恩恵地」の所有権ですら尊重されず、「第2、第3の剥奪」が発生したからである。私人が暴力的な方法で囲い柵を移動させたり、共同体の境界線となっていた小川や道の位置を移動させたり、あるいは小作や折半小作の契約を法的に悪用するなど、その手口は多様であった。<sup>(14)</sup> こうして、既に1968年の時点で、「恩恵地」総面積のうち4分の1以上にあたる15万ヘクタールが私人の手によって剥奪されていた。<sup>(15)</sup>

テムレム共同体も例外ではない。1935年に4111法の適応によって共同体が分割された際、当時共同体が所有していた土地の面積が約「恩恵地」面積よりも58.4ヘクタール分減少していたことが判明した。つまり、近隣の大土地の一つであるサンタ・ロサ・デ・コルピが、共同体からこの面積の土地を不正な形で剥奪していたのである。<sup>(16)</sup>

以上のように、まずマプーチェたちが今日推進する土地闘争の大きな背景として、彼らが歴史的に被ってきたこうした二重の意味での土地剥奪の事実が挙げられる。つまり、「平定」以前に祖先が保有してきた「旧領地」の大部分、および「平定」時に「恩恵地として認められながら剥奪された土地」に対する返還の要求である。

ところで、現在マプーチェたちが実際に土地闘争を展開する主な対象は、それぞれの共同体に近接するファンドだが、その多くは現在1980年代のピノチェ軍事政権時代に進出した植林会社の所有になっている。ホセたちが獲得したラ・ウニオンも、カウティン植林会社が所有するファンドであった。

新聞等でも植林会社が所有する土地の占拠、植林された林への放火や木の伐採、木材運搬機の破壊や放火、守衛に対する暴力など、過激な行動を含む行為に関する報道が連日のようになされている。もちろん、こうした行為を実行しているマプーチェはあくまでも少数だが、これらの会社に対するマプーチェの敵対心はかなり一般的なものである。そして筆者は、この植林産業に多額の投資を行い、本国への製紙用チップ輸出を大規模に行っている日系資本に対する不満も各地で耳にした。

ところで、これらの植林会社は旧ファンドの所有者に代金を支払って土地を購入している。言い換えれば、これらの会社が直接共同体の土地を奪ったわけではない。サンタ・ロサ・デル・コルピーが剥奪したとされる58.4ヘクタールの土地も、現所有者であるミニンコ植林会社はこれを前所有者から「購入」している。<sup>(17)</sup>

とすれば、歴史的な背景を考えればマプーチェたちの土地返還の要求を心情的には理解できるものの、なぜ「合法的に」土地を入手したこれらの植林会社がこれほど激しくやり玉に挙がっているのだろうか。これが当時筆者の抱いていた最大の疑問であった。

だが、複数の地区のマプーチェたちの話を聞いていくうちに、一つの共通する事実が浮かび上がった。すなわち、以前これらの大土地を所有してきた伝統的な富裕層と新しい植林会社とでは、近隣の農民に対する接し方が本質的に異なっていたことである。

植林会社の進出以前からアラウカニアに存在してきた伝統的な大土地所有者と共同体のマプーチェたちの間には、社会的な不平等性を内包しつつも、一種の相互補完的な関係が確立されていた。つまり、大土地の経営に不可欠な労働力として、近隣の共同体住民たちは賃金労働者や小作人などの形で雇用される一方、報酬の一部として家畜の放牧権や薪の採集権を与えられていたのである。<sup>(18)</sup> 市場に農作物を売りに行く際に、ファンド内の私道を通して近道をすることも可能であった。また、ファンド内には原生林が生えており、近隣のシャーマンたちはそこで自由に薬草を採取することを許されていた。

だが、軍事政権が推進した「新自由主義」的経済政策に刺激されてチリ南部に進出した植林会社には、地元住民との共生や環境保全といった発想は存在しなかったようだ。高度な技術を備えた機械を投入し、外部から熟練労働者を連れてくるため、地元に対する労働吸収効果は極めて乏しいものであった。<sup>(19)</sup> また、ファンドの周囲は鉄条網で厳格に囲い込まれ、家畜の放牧も薪の採集も、ファンドを通り抜けることも禁止された。原生林は伐採され、回転効率のいいラディアタ松やユーカリの林に姿を変えた。急速に成長するこれらの木々は水の吸収が早く、周囲の小川や地下水などの水源は枯渇した。その結果、共同体のわずかな土地における穀物や野菜類の栽培は、水不足によって打撃を受けた。<sup>(20)</sup>

さらに、大規模植林が及ぼしたインパクトは経済面に留まらない。マプーチェの祈願儀礼や治療儀礼の際には多様な薬草が使われるが、これらの薬草はかつて各地に存在した原生林

や湿原で入手することができた。だが各地のマチは、こうした薬草採集地の多くも原生林の伐採と湿原の枯渇によって消滅したと証言している。

こうして、かつて近隣の大地主たちと共同体の先住民の間に存在した一定の補完的關係も、これらの植林会社の進出によって破壊されてしまったのである。

つまり、「平定」以降の土地剥奪という歴史的怨念に加え、現状の貧窮生活をさらに困難に迫りやる植林会社の存在が現代の「マプーチェ紛争」の背景には存在するといえる。

一方、こうした事態に対し国家が全く手をこまねいて待っているわけではない。近年国際的な先住民復権の風潮が高まる中、1993年には軍政後初代の民政大統領エルウィン政権のもとで先住民の諸権利を法的に保証する新先住民法が制定された。この法律には、先住民共同体の土地拡張に関する規定も盛り込まれ、CONADI（国家先住民振興公社）を通じて合法的に土地を獲得する可能性が生まれた。こうして、正式な手続きを経て実際に土地を獲得する共同体のケースも出現している。

しかしながら、CONADI が擁する資金は小規模なものであり、貧困に苦しむ多くの共同体の要望を急速かつ同時に解決することが不可能であることも事実である。<sup>(21)</sup> こうして、「正式に登録したのに一向に相手にされない。」「国家も CONADI も当てにならない。」といった失望感を抱くようになった者も少なくない。近年アラウカニアの各地で勃発している土地占拠等の行動の背景にも、こうした失望と焦燥感が存在する。

ホセたちの場合も、正式に CONADI を通す形で土地要求を開始した。だが、CONADI の対応が遅く満足の行くものではなかったため、国家のより積極的な介入を求めて土地占拠等の実力行動に訴えるに到ったのである。そして、結局 CONADI がラ・ウニオンの旧所有者に土地代を支払うという形で決着したということであった。

### 3. ホセの証言の特徴

ホセは、トライゲン区に東接するエルシージャ区のパンゲコという共同体で生まれた。幼くして両親を亡くしたホセは、一時トライゲン区のコルピ・ノルテ共同体に移住したのち、複数のウィンカ土地所有者のもとで働いた。そしてシャーマンのメレヒルダと知り合って結婚したのち、彼女の実家のあるテムレム共同体に移り住み、昨年の7月に新しい共同体に引越すまで同共同体に住んでいたのである。

彼の自宅を訪問した筆者に対し、ホセは筆者の質問を待つことなく、今回の土地闘争に関する思いをほぼ純粋なマプーチェ語で一気に語った（(1)）。話の論理は明快で、「平定」期の土地剥奪と今日の土地闘争とが直線的に連結している。要するに「平定」時に祖先たちが奪われた領土を自分たちが闘って回復した、「仇を討った」という認識である。

この話を含むいくつかの証言から、今回の土地「回復」実現に関連してホセが重要視する3つの要因が指摘できる。

第1の要因は、幼少時における祖先たちとの交流の記憶と、その中で得た口伝の知識の重みである。



ホセは、父方祖父をはじめ実際に「平定」を戦った年輩のマプーチェたちから、当時の戦闘や土地剥奪に関する生々しい証言を受け継いでいる。証言（2）では、「平定」戦争に出陣した祖父や戦死した祖父の兄のことを誇らしく語り、自領地を守るために戦った「偉大な」祖先との直系の系譜を強調する。また証言（3）では、戦争中に銃で撃たれて負傷した怪力の戦士シウカのことを、敬意を込めて回想している。そして証言（11）では、祖父らが自分たちに託した土地回復の悲願と予言に触れ、それを自分たちが果たしたこと（「仇を討った」）を満足げに語っている。

前述したように、ホセが生まれ育ったのはテムレム共同体ではないので、「祖先の仇を討った」という表現は正しくないように見える。だがホセの意識の中では、地区レベルにおける個々の土地剥奪の事実よりも、「ウィンカ国家」による「マプーチェ民族領土」の侵犯という、汎民族レベルでの剥奪の図式こそが重要なのであろう。それゆえ、彼にとっては「テムレムにおける土地闘争＝祖父の希求の遂行」という等式が成り立つのである。

このように、「平定」戦争を戦った祖父たちとの交流や、彼らが口伝で残した情報や教訓が、今回の土地「回復」闘争にいわば「民族的義務」の感情と道義の正当性を与える根底要因としてホセの意識をつき動かしていることがわかる。そして、こうした口伝の知識は、「語り部」であるホセの口から共同体の若い世代の人々にも伝えられている。

ゆえに、少なくともホセの場合について、土地闘争の原因を「外来の政治イデオロギー」による「洗脳」といった外因決定論だけで説明することには無理があるといえる。

しかしまた彼は、マプーチェ文化の伝統的要素である口伝の情報のみに固執しているわけではない。同時に、ウィンカ（ヨーロッパ系住民）の文化要素であった「読み書き」の能力を重視し、これを若い世代のマプーチェたちが身につけて積極的に活用したことを土地回復の実現に貢献した実践的な要因として重視している。

実際、1990年代に入ると、高等教育を受けて専門職を身につけると同時に、民族主義的な運動を展開する多くの若者マプーチェが現れた。スペイン語の読み書き能力、法律上の知識、植民地時代や「平定」などの歴史的事件に関わる一次資料の操作、出版やラジオ放送等、ウィンカから学んだ要素をマプーチェ民族の擁護・復権のために活用する、そうしたタイプの指導者が各地で出現しているのである。

このような「知識人マプーチェ」が、ウィンカ活動家たちとの接触を通じて、「外来政治イデオロギー」の影響を受ける場合もあるだろう。だが、彼らの場合も、その行動を外因決定論だけで説明することには無理がある。

例えば、ホセの甥で今回の土地獲得において指導的役割を果たしたファン・ペドロも中等教育を受け、トライゲン区放送局のマプーチェ語放送のアナウンサーを務めている。

だが、一方で彼は、共同体最高の伝統的宗教権威を体現するシャーマンを伯母と妹に持ち、彼女たちに憑依する「神たち pu lonko」のメッセージを、みずからの政治行動の指針に据えている。筆者が参加した儀礼の場でも、ウィリバンはマチに憑依した「神」の言葉に従い、新しい共同体の「聖なる場所」の位置を決定している。もちろん、マプーチェ語による演説能力にも優れており、ホセを始めとする共同体の年輩層の助言も尊重する。

このように、今回のテムレムの土地闘争において主導的役割を果たしたとホセが認識する「読み書きを覚えた若者」とは、マプーチェとしての伝統的意識を保持しながら、実践的なウィンカの要素を積極的に活用して闘争を展開する人々である。そしてホセの説明によれば、こうしたウィンカの知識の習得による土地回復の実現という発想自体も、実はすでに彼の祖先たちが残した予言の中に含まれていた（(1)）。

そしてもう一つホセが強調する要因は、先住民擁護派のウィンカの存在である。

証言（1）に登場する「元チリ大統領エルウィンの子」とは、先住民の土地拡張の可能性を規定する「新先住民法」の実現に尽力した元エルウィン大統領の息子、ホセ・エルウィン氏のことである。弁護士である彼は、先住民の権利を擁護する立場から活発に学術的・法的活動を展開してきた。ホセの証言では、土地占拠者を排除するために到来した当局者に対し、土地要求の「正当性」を証明するのに決定的な役割を果たしたのはホセ・エルウィン氏が彼らに渡した「地図」<sup>(22)</sup>であった旨が説明されている。

以上のように、少なくともホセの認識の中では、テムレムの土地闘争の生起プロセスにおいて、闘争のいわば起因を形成した民族の記憶、「合法的」闘争を可能にしたウィンカの知識の吸収、そして、闘争を後押しした先住民擁護派ウィンカの協力など複数の要因が結合していたことがわかる。

以上ホセの証言のうち、祖先たちに関する回想と現在の土地闘争の経緯に直接関係する部分について説明した。以下、それ以外の証言について説明しておこう。

ホセは証言（4）～（6）で、「平定」と「第1の剥奪」に関連する3名の重要人物についてのエピソードを語っている。

1人目はマプーチェの有力者コリピー<sup>(23)</sup>である（(4)）。「レメウェイコのコリピー」とは、一応、独立戦争期<sup>(24)</sup>から19世紀の前半を通じて、一環してチリ政府に協力する立場を取り続けたロレンソ・コリピーを指すように思われる。コリピー一族はチリ政府との軍事上の友好関係を背景に、平原北部地域一帯に強力な勢力圏を形成していた。また、ロレンソの甥にあたるウィンカ・ピノレビーはチリ政府による「平定」に協力したため、敵対するマプーチェ集団の襲撃を受けて死亡している。エル・メテオロ紙は1868年11月14日付けでこの事件を報じ、「政府はその片腕を失った」<sup>(25)</sup>と遺憾の意を表明している。

それに対し、ホセの語るコリピーは、勇猛な戦士でありながらチリ政府に加担してウィンカの侵略を招いた張本人という否定的な評価を与えられている。この説明では、ロレンソ本人が「平定」に協力したように理解されるが、実際にはロレンソは1850年前後に死亡している。したがってホセが語る「裏切り者」的コリピー像は、半世紀以上にわたってチリ政府に協力し続けたコリピー一族の複数の人物に関する情報が融合して形成されたものと考えられる。

なお、独立戦争期に王党派を支援してロレンソと対立した人物に、ホセの父方姓と同名のカディンという人物がいた。<sup>(26)</sup>もしホセがこの人物の血筋を引くとすれば、コリピー一族に関する否定的な内容の伝承が一族の間で継承されてきた可能性も高い。

コリピーに続いてホセの話に登場するのは、「平定」実行の最高責任者であったコルネリ

オ・サアベドラ大佐である<sup>(27)</sup> ((5))。サアベドラは、「平定」以前の時期に行われていた個人による無法なマプーチェの土地獲得を抑制し、先住民の「最低限」の土地所有を保証するために、「国家による平定」の必要性を提唱した人物である。<sup>(28)</sup> その意味では、消極的な形にせよ、先住民の土地所有を「擁護」したと言えるかもしれない。

ただサアベドラは、決して先住民の自立的存在を認めていたわけではない。例えば1861年にマジェーコ線の確立を提案した計画書の中で、サアベドラはこの軍事工作を「野蛮に対する文明の高貴で偉大なる闘い」<sup>(29)</sup> と表現している。

それに対し、ホセの語るサアベドラは、武力でマプーチェたちを海岸地帯に追い込み、老若男女の別なく銃殺を命じた非道の人物である。サアベドラが提案した「最低限の先住民の土地所有の保証」も、トライゲンのマプーチェたちにとっては結局「武力による領地剥奪」に他ならなかったのであろう。

ホセが一旦話終えたところで、筆者はより古い時期、すなわち16世紀のスペイン人による「征服」の話を開こうと思って質問してみた。だが、「スペイン人 español」というスペイン語表現を聞いてホセの口から帰ってきたのは意外な人物の名であった。「イルスティア」である。<sup>(6)</sup>

これは、やはり19世紀後半の「平定」当時アラウコ州知事等の要職を歴任したバシリオ・ウルティア大佐<sup>(30)</sup> のことである。ウルティアは正史ではサアベドラに次ぐクラスの「平定」功労者として特筆される存在で、トライゲン地区での要塞建設や、「国有化」した「無人地」の競売など、重要な実務を担当した人物でもある。彼も、「平定」によって国有化した土地を「野蛮から救い出した土地」と表現していた。<sup>(31)</sup>

だがホセの語るウルティアは、祖先たちから土地を「奪い」、イタリア人をはじめとするよそ者に与えた張本人であった。また、「紙に書く術」、「スペイン語」、「貨幣を知らなかった」という指摘は、「平定」期の所有地画定の際、こうしたウィンカ的知識を持たないマプーチェたちを欺く形で、不当な土地剥奪が犯されたという認識を示している。

このように、チリの国家統合に多大な形で貢献した「平定」の「名士」たちは、ホセの認識の中では極めて否定的な評価が下されている。だが彼は、ウィンカ一般を憎き民族の敵として無差別に敵視しているわけではない。自分の半生を語る際に自然に彼の口をついて出たあるウィンカたちに関する回想は、むしろ深い愛情に満ちたものである。

まずホセは証言（７）で、アリオンソ・クラベリ（アロンソ・クラベル）という人物の所有するフンドで働いた経験を語っている。ホセにとってこの地主は、シャーマンである妻をフンドに連れて来て一緒に住むように勧めたり、さまざまな食糧や家畜などを与えて援助してくれたりした心優しい人物であった。

そしてもう１人、ホセが特に愛情を込めて回想するのは、ナンカウェというフンドの地主であったラファエル・フィゲロアという人物である<sup>((8))</sup>。ナンカウェは、まさに今日テムレムの人々が「旧領地」として返還要求の対象にしているフンドの一つで、現在ではラファエルの息子と思われる人物の所有になっている。<sup>(32)</sup> だがホセの語る地主フィゲロアは、ウィンカの弁護士でありながら、ホセが何か問題に巻き込まれるとすぐに彼の弁護に立ち、テム

レム共同体随一のシャーマンであったホセの妻(メレヒルダ)にも愛情と敬意を持って接した人物であった。

さらに、ある干魃の年にフィゲロアが実施を要請したマプーチェの祈願儀礼に関するホセの回想から、ラファエルの「共存的」態度が単に経済・政治的な局面だけでなく、文化・宗教的な側面にまで及んでいたことがうかがえる((9))。

「平定」期にチリ国家や移民たちが行った土地剥奪を現代の土地闘争の根本的原因としてあられだけ激しく糾弾しているホセが、みずから仕えた「ウィンカ大地主」たちのことをこのように深い愛情とともに回想するのを聞いて、筆者は矛盾とを感じるよりも、むしろ何か救われるような気持ちになったことを覚えている。

だが、軍事政権期に進出してきた外資系の植林会社に対するマプーチェたちの視線は明らかにこれとは異質なものである。ホセの妻メレヒルダの証言((10))からは、「資本の回転効率の最大化」を至上命令とし、「合法的土地所有」の事実を盾にとって、環境破壊や周囲の住民たちへの影響には無感覚な植林会社のイメージが浮かび上がる。

少々牧歌的な見方になるかも知れないが、異民族であっても、たとえば民族的・社会的な不平等性が顕著な「平定」以降の状況を既成事実と見なしたとしても、どこかに「他者」を尊重し、共存しようという発想があれば、これほど深刻な土地闘争には発展しなかったのかも知れない。ホセたちの話を聞きながら、そんな思いが筆者の心には浮かんできた。

以下に呈示する証言は、マプーチェ語とスペイン語の二言語を使って行われた。読者の便宜を図るため、原語による証言のうちスペイン語で発せられている部分、および対訳のそれに対応する部分には下線を付すことにする。

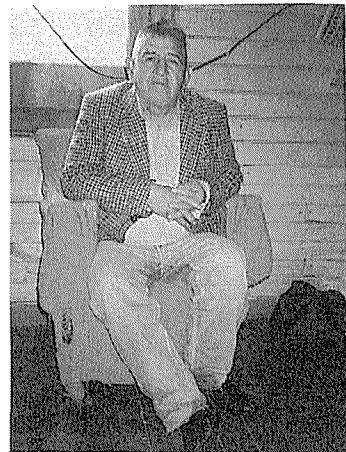
#### 4. ホセの証言 (Testimonio de don José Cadín Pichún)

##### (1) 「平定」とテムレムにおける土地回復闘争

よかろう、ベニ。そういうわけで、わしはあんたがここに客として来てくれていることに感謝する。人の訪問を受けた時には「感謝」と言うのだ。あんたは話を覚えて帰るため、事の次第を少々知って帰るために来ておる。

我々はこの国、チリでな、昔の事だが、我々の先祖たちは戦った。彼らは追い出され、より悪い土地へと追いやられたのだ。そうしたのは「コロノ (植民者)」たち、そうしたのはイタリアーノ (イタリア人) たちじゃよ。

だが、マプーチェの間にはロンコ (地区首長) がおつてな。そのロンコの、その者の行いが、その者の語りが忘れ去られることはない。「だが、いつの日にかな。」と(ロンコは) 言った。「いつの日にか、子孫たちが成長す



ホセ・カディン・ピチュン

れば、文字を読み書きする術を覚えれば、事実を見出し、事の次第を見出すはずじゃ。」と言ったのだ。それで、（実際に）事が明るみに出ているのだよ、ペニ。

そんなわけで一人の若者<sup>(33)</sup>が大学で事の次第を発見したのだ。そのロンコは土地を売ってなどいない。奪われたに過ぎないのだということを。力づくでな。無理やり追いやられたのだったことをな。今、マプーチェはそんな風に行動しているのだ。で若者たちは成長し、読み書きを覚えたのだが、昔のマプーチェたちはそれを「紙に書く術」と言っておった。我々の先祖たちは知らなかった。紙に書く習慣など持たなかったのだ。紙に書く術を身につけ、その次第が明るみに出たので、自分たちの土地を取り戻せたのだよ。

こうして我々はこの丘におる。が、我々は皆の者に呼びかけたのだ。「みんな来てくれ！」と、そう言ってな。我々にはもやは土地がなかったからだ。

小さな男子も息子も娘も成長した。奉公するためにウィンカのもとに出かけたのだ。大きな集落へと出かけていった。奉公するためにな。そんなわけで我々は、わしの娘は、我々の息子は奉公した、と言ったのだ。住み込み奉公人みたいなものにすらなったのだよ、彼らはな。

それで我々は策を練ったってわけだ。このペドロ・ウィリパンは学校に入った。ある偉大な学校に入った。で、その年少の、その若者はテムレムの土地について事実を明るみに出したのだ。「我々は土地を、この土地を奪われたことになる。」と、そう言ったわけだ。

それから政府のロンコがいる。政府の、エルウィンの息子じゃ。その者が我々に「紙」をくれたのだ。エルウィンの息子がな。チリ大統領エルウィンの息子がな。で、その男のお陰でもう我々は与えられた、地図を手に入れたのだ。「最終的な地図」というやつをな。

それでじゃ。「これを使って、どうしてもこの土地を取り戻すのだ」と言ったのだ。取り返そう。どんな手段に訴えてでも土地を取り返そう。戦おう。なぜなら、もうこれ以上耐えることはできないのだから。そう言って、昔の人たちは300年、500年以上も戦ったのだ。どうだね、これは。土地を取り返そう。これだ。これが地図だ。」と（そう言ったのだ。）

我々はそこにいた。だが集まったのは40名のマプーチェだけだった。他の者たちは恐れをなした。そこにやって来たのは、200人以上のカラビネーロ（警官）がやって来た。我々を追いつめるためにな。（彼らは）「ここがフンドの境界線だ。」と口々に言ったのだよ、ペニ。

で、それでな、（我々が）「この土地を、今日この日に我々に渡してもらおう。これが地図だ。」（と言うと）それを見て、主立ったものが、カラビネーロのロンコ（長）が言った、「確かに彼らの言う通りだ。」とな。ゴベルナドール（州知事）も口を開いた。やはりこう言った。「マプーチェたちの言っていることは本当だ。」とな。「この者たちには土地を返されて当然の理由がある。」と言ったのだ。その者はそう言ったのじゃよ。それで我々はこの土地を買い与えられたというわけだ。

チリの国家は（かつて）我々にそんな仕打ちをし、ウィンカが我々から（土地を）奪った。それで我々は追い出され、戦いをしかけられたのだ、昔の人たちはな。その我々の祖父じゃ。だが我々は仇を取ったのだよ、ペニ。われわれはまだ生きているのだ。

われわれは、だがな、「気力を尽くそう」と誓ったのだ、ペニよ。それで、今日この日にあなたはこの地に来てくれている。一面に広がる大きな土地を我々は回復した。どうやってかっ

ていうと、なぜなら我々は氣力を尽くしたからだ。恐れなかったからだ、何をも、どんなウィンカをも我々は恐れなかった。カラビネー口さえもな。「死ぬ運命ならば死ぬだけだ。死なない運命ならば死にはせん。だがとにかく我々は土地を取り返そう。どんな方法に訴えてでも土地を渡してもらわなければならん。」と、我々は口々に言ったのだ、ペニ。それで今日この日に、我々はここに居ることになったわけだ。で、あんたがやって来てくれている。あんたが訪れてくれたことに感謝したい、ペニよ。

あんたは、その事の次第に関する知識を持ち帰って、「そのマプーチェたちはそういう風に生活していた。」と言ってくれ。

そのアントニオ・ニリビルという、その者は土地を売ってなどおらん、奪われに過ぎんとわれわれは口々に主張したのだ。その男をウィンカは苦しめた。その男はロンコだった。テムレム・グランデという土地、集落の王だったのだ。奪われたのじゃよ。

それで、我々はその事実を見い出した。事の次第を見い出したのだ。それで、今日のこの日に土地を取り返したというわけだ。でなければ貧しい者として、あるいはそんな風に生きていところだろうよ。なぜなら、もう我々はありとあらゆる貧窮を、あらゆる貧困を経験した。いやというほど我慢したのだ。我々は我慢して生きてきた。昔の人は全てを失い、二度と土地を取り戻すことはなかったのだからな。

しかし勉学を修めたので年少の、若いものたち、少女たちは恐れなどしなかった。娘たちは恐れなかった。「紙」を目にしていたのだからな。「一体どの者が（土地を）売ったというのだ。」と、口々に主張したのだ。ウィンカの策略だったのだと。今では我々は土地を取り返したのだよ、ペニ。話はそこまでとしよう、ペニ。

## (2)「平定」戦争に参加した祖父

わしの先祖たちは「語り部」じゃった。「語り部」をしていた。語り部じゃ。フアン・デ・ディオス・カディンという者（父方祖父）がおって、姓はパイジャミンといった。

その人は戦争を経験した。「わしは戦いを経験した。」と言っておった。ルマコで、ルマコ区でのことじゃ。で、それは（ウィンカが）やって来て最初に建てられた集落じゃよ、ペニ。で、彼ら（祖父たち）はそこに出かけて行ったそうで、わしの父方祖父の兄はそこで戦死したのだ。ピチ・ウィンカという名じゃった。死んだ。戦死したのだ。とても勇敢な者じゃった。それでその者は変わり果てた姿になった。殺されたのだ。ピチ・ウィンカという名じゃった。そういう人をわしは先祖に持つのだよ。

## (3)「平定」戦争に参加した年長者シウカの回想

わしが会っていたその人の名は、ある年輩の男性ともわしは会っていたのだが、その人はシウカという名前じゃった。その人ともわしは顔を合わせていたが、戦争を経験したのだ。その偉大な人は戦争をくぐり抜けたのだ。ここに穴が開いていた、ここんともな。鉄砲で

撃たれたのだ。ここに穴が開いていた、ここにな。ここにまでも。死んでしまうところだったのだ。（中略）彼らは槍を手にして戦ったのだ、その者たちはな。銃は持っていなかったのだ。もし銃を持っていたらウィンカを壊滅させていたに違いない、ああ。マプーチェはとても頑強だったのだ。それで、こうしたものでウィンカを突き刺していた。片手で相手を持ち上げていたのだよ、ベニ。棒を使って…。仕上げていたのじゃ、槍にな。「フン・ルギ」（先を尖らせた葦槍）という。先っぽをそんな風にきれいに仕上げて、時にはナイフみたいに鋭くなることもあったのだよ。

この者はウィンカの奴らを運んで行って、別の場所に放り投げていたのだ。彼らはすごい力を持っていた、だろ。1人の人間が片手で、1本の棒でそんな風にできるっていうんだからな。どうやってかと思うだろ。力持ちだった、だろ。それがこの地、チリにいた最初のマプーチェたちじゃよ。昔の人たちはすごい力の持ち主だったのだ。

（中略）

そんな風にわしは年輩の人たちに会っていた。それを、そういう事を彼らは話していたのだ。彼らの話は消え去ることはない。事の次第は伝えられて行く。どのようにして土地を奪われたのか、（ウィンカたちが）どこからやって来たのかということの人々は見出しした。この者たちは北からやってきたのだ。（マプーチェは）力づくで追いやられたのだ。

#### （4）マプーチェ支配領域へのウィンカの侵入を許したコリピーの政府

それからこの地に建てられたのだよ、ベニ。マプーチェの政府がな。コリピーという名じゃった。

そのマプーチェはここ、レメウェイコの出じゃ。その地の出身だったのだ、そのロンコはな。だが、とても勇猛なマプーチェだったのだよ。何も恐れはしなかったのだ、ああ。

で何が起こったかと言うとな、ベニ、少々事をまずく運んだのだ。敵（チリ政府側）に加担し過ぎたのだ、（コリピーの）政府はな。マプーチェの政府はな。それでその者の考えで少々まずいことにしてしまっ、それでウィンカたちは侵攻し続けたってわけだ、うん。うまく事を運んでおれば、もしかしたら今でもマプーチェが支配していたかもしれないのだがな。で、（ウィンカが）ピオピオ川からこちら側に侵入して来ることはなかっただろう。やって来ることはなかっただろうよ、うん、ベニ。そこまでが境界線だったに過ぎんのだからな。だが、（チリの）政府がマプーチェを封じ込めたので、それで侵入してきたのだ。住んでいたところを追いやられ、それでウィジチェ（南方のマプーチェ）の方へ避難したのだ。兄弟たちは昔そのことでとても苦しんだのだよ。それで、（チリの）政府が支配することになった。全てを支配することになったのだ。（マプーチェ）民族の領域をな。

#### （5）コルネリオ・サアベドラが命じたプエルト・サアベドラにおける虐殺

だがマプーチェが忘れてしまうことはないのだよ、ベニ。それにマプーチェは決してひる

んだりしなかった。で、彼らがどのように殺されたかというのだ、ペニよ。この時どのように海岸に追い詰められたかというのだな。プエルト・サアベドラというところにやって来たのだ。あんたはそっちの方に行くかね。

プエルト・サアベドラ、そこには丘がある、だろ。それで、その丘の中に彼らは入り込んだ。そこではウィンカたちは彼ら（マプーチェ）を殺すことは出来なかったのだよ。というのは、やって来るウィンカは殺されていたからな。マプーチェがくじけることはなかったのだ。マプーチェたちには食うものもなかったのだから。（中略）

そんな風にしてプエルト・サアベドラの地に、そこにこのもの（マプーチェ）たちは集まったのだ。もう奥に行くことはできなかった、もう海に行く手を阻んでいたからな。海じゃ。そこで、そこに避難したのじゃ、マプーチェたちはな。「避難 kūkañ」という。

それで娘たちはそこに着き、皆がそこにたどり着いたのだ。で、もはや向こうに渡ることはできず、殺されることになって、攻撃を受けた、うん。ウィンカの攻撃的になったのだ。「銃弾」で殺された。銃で撃たれたのだ。

銃で撃たれたのだが、その者の名は、そこで殺戮を行ったその男は隊長じゃった。コルネリオ・サアベドラという。コルネリオ・サアベドラじゃ。それで付けられたのだ、サアベドラ港という名がな。そう名付けられたのじゃよ、ペニ。歴史について話せば種は尽きん、ペニよ、だろ。

#### (6) マプーチェの土地をウィンカ移民に分配した「スペイン人」イルスティア

「筆者」それからあなたはいくつかの事をご存じですか、例えばスペイン人という男たちがどのようにしてやって来たのか、つまりチリ人の前にですが。

「ホセ」わしの昔の父方祖父は言っておった、この者、そのスペイン人について、イルスティアという名だったそうだが、その者が人々を追い出したのだと言っておった。その者は何だ、言ってみれば…、何というか、判事のようなものだ。その判事が取り決めていた…。その者が土地を取り上げ、ウィンカに与えた。イタリアーノややって来た全ての者たちに与えたのだ。マプーチェは追いやられたのだ。なぜなら、マプーチェは紙を扱う術を知らなかったのだからな。知らなかったのだ。ウィンカの言葉も知らなかったのだ。

「メレヒルダ」何を言われているのかわからなかった。貨幣も知らなかった。それで、どんなにわずかな貨幣と引き換えにそんな風にされても、よしとしてしまった。そんな風に土地を手に入れていったのだ。すべてを囲い込みおったのだ、ウィンカはな。

#### (7) 地主アロンソ・クラベル氏との友好

わしはあるフンドに住んでおった。別のフンドに移ったのだ。アロンソ・クラベリというウィンカのところにおったのじゃ。ご主人様はもう死んでしまったがな。そこではもうその金持ちはいつも車でわしを送ってくれたものじゃよ。とてもいい人だ。「お前の奥さんを



連れてきなさい。」と言ってくれた。「ここに奥さんを連れてきなさい。」とな。

で、もう彼女はマチだったので、アリウエン（マチが儀礼で使う階段状の木彫り）を持っていくわけにはいけなかった。アリウエン、つまりレウエじゃ。それでその考えから、アリウエンというのだが、それをグリンゴ（スペイン系以外の白人）のところに持ってくるのは都合がよいことがある。で、それでわしはな、でなけりゃわしは…、彼女と一緒にそのフンドに住んでいるところだろうよ。

それから、わしはととてもいい主人たちにめぐり会った。自分の努力で気に入られたのだがな。わしはととても熱心に仕事をしたのだよ、ペニ。わしは疲れることなどなかった。痩せてはいたが得意だった、仕事にはタフだったのだ。

そういうわけで、そこに住み着くことはなかったのじゃよ。だが、その金持ちはわしにあらゆるものを与えてくれた。あらゆるものを与えてくれた、わしを援助するためにな。なぜならあの人はわしがみなし児だということを知っていたからじゃ、その金持ちはな。だが、生の小麦粉から何から分けてくれた。小麦やら豚やら何でもわしに与えてくれたのだ。わしがあの人に仕えていたからだがな、うん。

というのは、そのグリンゴは1人になったのだ、ペニ。両親が死んで、わしと同じように1人ぼっちになった。でもわしはあの人のフンドの面倒を見た。わしが全ての鍵を掛けていたのだ。でも盗むことなどなかった。盗んでたら、金持ちになっていたところだろうよ、ああ。ご主人のものは金輪際何も盗んだりなどせんかった。ありとあらゆる全てをちゃんと管理して、あの人の持ち物を整頓していたのだ。わしは食事もある人と一緒にしていた、主人とな。

そんな風にわしは人生を過ごした。とても苦労したのだよ、わしが一人前の男になるためにはな。

それで、あの人たちもこいつのことを大事にしてくれた、みんながな。でその後、あの人が先に妻を迎え、わしも妻を迎えた。ご主人たちは二人とも死んでしまったのだよ、なあ、わしらはわしの妻と二人でまだ生きていうのにな。レケル・ウリベという名じゃった、わしの女主人はな。レケル・ウリベじゃ。そんなわけで、それでわしが仕えたご主人はととてもいい人だった。何も言うことなどありません。

#### （8）フンド・ナンカウエの旧地主ラファエル・フィゲロア氏との友好

で、それからわしはフンドに入った。（中略）ナンカウエじゃ。フンド・ナンカウエ、ラファエル・フィゲロアのな。その主人もわしにととてもよくしてくれた。決して、他の誰にも何もしてやることはなかったが、だがわしにはどんな親切でもしてくれた。その偉大な金持ちはわしにととても良くしてくれた。で、決して何も起きないようにと配慮してくれていたのだ。（わしが）いちゃもんを付けられるようなことがあると、あの人はすぐわしのために動いてくれた。腹を立てて、「けしからん！」と言ってな。弁護士だった。その人の家族7人が弁護士じゃ。息子たちも娘たちも、そして娘婿たちもな。弁護士なのだ。

そこでは、わしはもう家畜を飼うことができた。わしに家畜を与えてくれたのだ。放牧もさせてくれた。わしだけじゃ。他の誰にもそうではなかった。そうではなかった。だがわしにはそんな風にしてくれた。それから妻のことをかわいがってくれた。「マチさん。マチさん。」と言ってな。で、彼女のことをとても尊重してくれたのだ。彼女が貧しい身なりでいることを嫌ってな。その金持ちは「いけない。」とな。「いけない、いけない。この人にみすばらしい格好をさせていてはだめだ。こちらは神の娘なのだからな。」と、そうその金持ちは言っていたよ。百万長者なのだがな。フンドを3つほど持っていた、ここにな。パンゲコの北にな。「そんなことではいけない、カディンよ、なあ。」とわしに言っていた。だが、その金持ちのわしに対する信頼の大きさといったら、ああ。食べるようにといって馬を1頭くれていた。それをくれていたのだ。「馬でも食べるといい、な。」と言ってな。「馬肉はマプーチェの好物だろ。で、わしにも少し持ってきてくれよ、な、お前。」「わかりました、ご主人様。」わしは仕えるために側にいた。出来る限りきれいな身なりにしてな。その金持ちに気に入られるためにじゃよ。そんな風にわしは育ったのだ、ベニよ。

#### （9）フィゲロア氏の要請で実施されたマプーチェの祈願儀礼「ギジャトゥン」

この地の昔の金持ちのウルメン（富裕者）、偉大なる百万長者はギジャトゥン（マプーチェの祈願儀礼）を好んでいたものだ。昔のことだが、ここチリで火山が噴火したことがあった。だがその時はこんなにも（灰が）積もって牧草もなくなり、家畜たちはさまよっていた。水はこんなふうに灰で覆われていた。家畜は水を飲むところも食べるものもなくて、吠え叫んでいたのだ。

そこで一人の大金持ちが登場したというわけだ。御存知ラファエル・フィゲロアだ。「なあ、お前。」とわしに言った。「あのな。お前の妻はマチだ、な。（だから）ロンコ（共同体の首長）は必要ない、だろ。」と言ったのだ。「ギジャトゥン儀礼をやっておくれ。わしらはいくら何百万ペソの金を持っても、わしらに神が報いることはないのだよ。」と言った。「いや、いや、いや。わしらがそうすることはできん。」と言ったのだ。だがお前たちは、マプーチェ民族は神と対話するための、神に祈るための文化を持っている。で、お前たちならお慈悲を受けられる。お前たちなら（神様も）信じてくれる。」とな。

「いいでしょう。」わしはあの人に言った、「でも出費の方はどうしたらいいんです、旦那様。」（すると）「倉庫を開放しよう。」と言ったのだ。「豆、小麦、ジャガイモ、その他何でも取りに来なさい。ムダイ（小麦で作る儀礼用の酒）を作りなさい。」と、そう言ったのだよ。

それでわしらはそこでギジャトゥン儀礼を行なったわけだ。でその立派なグリーンゴ、金持ちは約束を果たし、で彼はフンドの管理人や牧童など8人位で馬に乗ってやって来た。儀礼を見にやって来たのだ。でその偉大なウインカ、その金持ちは、皆が陽の出る方を向いてひざまずくと、あの人は馬をそちらの方角へ向けた。馬からは降りなかったがな。それから皆が海岸の方を向くと、あの人もやはり馬の向きを変えて、海岸の方を向かせた。でわしらが帽子を取っていたので、あの人も自分の帽子を取ったのだ。

すると翌日にはもう雨が降ったのだよ、ペニ。水が降り始めた。その日のうちに雨が降ったのだ、午後にな。夜には雨が降った。すぐに雨が降った。だが、それはまるで運河のような、大粒の雨じゃった。降り続けたのだ。だが、その偉大な人、金持ちは帰ろうとはしなかった。皆がすべて立ち去ってしまうまで残って、それから立ち去ったのだ。な。その人は本当に神を信じている、だろ。その金持ちは信じている。マプーチェのことを信頼しているのだよ。で、その時わしにこう言ったのだ、「ほら、わかっただろう、お前。」と。「お前は雨を降らせることができたじゃないか。」と言ったのだ。な。

その金持ちはわしにとっても愛情を注いでくれた。わしのことを心から大事に思ってくれた。その人は、わしに家畜も飼わせてくれた。なぜって一体どこで家畜なんか飼えるものかね。わしには土地がなかったのだから、な、ペニ。でそのウィンカとわしは折半で牛を飼った。（お陰で）わしは二十頭も家畜を持つことができた。でその人はわしに放牧もさせてくれた。わしは馬も二頭持つことができた。

その金持ちはとても美しい信心を持っていたのだよ。

#### (10) 植林会社による環境破壊（長老マチ、メレヒルダ・ウェンテラオの証言）

それからやって来た。さらに入り込んで来て、もっとひどいことにされた。木を植えたせいで水も何も枯れた。水は乾いてしまった。もう低地に（水は）なくなった。かつては湿地があった。低地があった。水がたくさんあった。とてもいっぱい真っ白な水があったのだ。夏の日でも、暑い時でも新鮮な水がな。みんなその木のやつが吸ってしまったのだよ。

そんなわけで薬草はほとんど見つからなくなった。昔はとてもたくさん湿地のところにあったのだがな。とてもたくさん低地のところにあった、薬草がな。葉っぱの薬草も木の薬草も草の薬草も。いまではなくなってしまった。とても遠いところに逃げていってしまった。<sup>(34)</sup> この木の奴が食ってしまったのだよ。

そんなわけでこの地で我々はそんな状態になってしまっておる。われわれは今ではこんな風に生活しておる。こんなざまになり果てたのだ。大きな森林を植えおった。「植林」が入り込んだのだ。別のところ（外国）のウィンカが来た。そいつらはやってきたのだ。それで居着いて大きな、フンド全体を丸ごと買ってな、こんなに大きなフンド一面に植林しおったのだ。それで何もなくなってしまった。昔はニエグム茸が生えていた。レウル茸も生えていた。なくなってしまった。今では死滅してしまったのじゃよ。

#### (11) 剥奪された土地の奪回を予言した祖父

しかし、年輩の人たちは言っておった。わしは会っていた、あんたに言っておる、話しておるシウカのことじゃ。シウカやわしの祖父で語り部のファン・デ・ディオス・カディン・パイジャミンに会っておった。「いつの日か、お前たちが生きておれば取り戻すことになるはずじゃ。氣力をふりしぼること。恐れぬことじゃ。」、そう言っていた。

先祖たちは（ウィンカが）土地を返還しなければならんということを知っていたのだ。年輩の人たち、偉大な昔の語り部たちはな。それで「お前たちは、いつの日かお前たちの土地を奪い返すことになるはずじゃ。」と言った。「お前たちの土地なのだからな、ペニよ。」と言ったのだ。「いかなるロンコ（首長）も土地を売ったりなどしておらんのだから。」と、そう言ったのだ。

# (1) "Pacificación" y la lucha por la tierra en Temulemu

Felei, peñi. Femngechi ta mañumeyu ta mi wütrapan ta tüfa meu. Mañum pi ta che ta wütrakontungei, miaulimi ta nütram, miaulimi ta pichiñ ta mi kimalu.

Iñchiñ tüfachi paí meu, Chile, iñchiñ kuifi meu fúchake che aukai. Wemungeingün, rinconantukungeingün doi wiya mapu meu. Femeyu colono, femeyu ta italiano.

Welu mapuche mülefui ta lonko. Feichi lonko tüfei aflai ta ñi dungu, aflai ta ñi nütram. “Welu, ka antü” pi. “Ka antü tremle nga choyün, kimle nga chillkatun, petuai nga dungu, petuai nga nütram”, pi. Femngechi pengetui dungu, peñi.

Femngechi ta kiñe weche kona, en la Universidad ta peputui dungu. Tüfeichi lonko fendelafui mapu. Müntuñmangei müten. Newen meu. Ngürküntukungeingün. Femekei ta mapuche ta tüfa meu. Y tremtulu ta wecheke kona, amutulu ta ñi chillkatun, “papeltun” ta tüfei pi ta fütake mapuche. Iñchiñ ta in fütake che ta kimlafui. Ngelafui ta papeltun. Mülelu papeltun, pengetulu tüfei, petui ñi mapu engün.

Tüfachi winkul mu ta müleñ ta tüfa meu, mütrümfiiñ ta kom che. “Küpamün” pifiñ. Iñchiñ ta niewelaiñ ta mapu.

Tremi ta pichike kona, fotüm, ñawe. Amui winka mu serfialu. Fütake kara meu kompi. Serfiafilu ta tüfei. Femngechi iñchiñ chen mu, iñche nga ñi deya, iñchiñ nga ñi fotüm nga serfiawi pi. Limpiaor ngeputui reke ta tüfei engün.

Fei meu iñchiñ ta ngüneduamiiñ. Tüfachi Pedro Huilipán koni escuela meu. Kiñe fütä escuela meu koni. Feichi pichi wentru tüfei nentuputui dungu Temulemu mapu. “Iñchiñ ta tuñmangerkeiñ mapu ta tüfa”, pi.

Ka mülei ta lonko gobierno. Hijo del gobierno, de Aylwin. Fei elutueiñmu papel. El hijo de Aylwin. Presidente Aylwin chileno. Entonce ese hombre feiti am femlu, ya elungetuiñ ta, petufiiñ ti chi plano. El plano finitiu pingei ta ti.

Ya. “Tüfa meu, chem mu tüfachi mapu tuaimün” pi. Elumutuaiñ. A la buena o a la mala, tutuaiñ mapu. Kewaañ. Porque ya aguantawelaiñ. Fei pi ta fúchake che más de trecientos, quinientos años guerreando. ¿Cómo esto? Elumutuaiñ mapu. Tüfa lle chí. Tüfa lle ta plano.”

Iñchiñ ta müleñ. Meli mari mapuche müten trawi. Llukai kakelu. Puwi ta, má de doscientos carabinero puwi. Wemungealu iñchiñ. “Tüfa mu ta linde ta mülei” pipingei “pu fundo”, peñi.

Y fei meu, “tüfachi mapu ta iñchiñ elumutuaiñ fachiantü chi antü elumutuaiñ.

Aquí está el plano.” Lelingei, el mayor de, lonko, carabineo, “Están en la verdad.” pi. El gobernador kafei pi. También dijo, “Están el la verdad los mapuches tüfei. Tiene too su razón ta ñi elungetual mapu tüfa engün,” pi. Pi ta tüfei. Fei mu ta nguillangeiñ tüfachi mapu.

El Estau Chileno iñchiñ ta fei ta chemeiñmeu, wemutukuleleiñ ta winka. Fei mu ta wemungeiñ, aukangeiñ ta füchakeche yem. Lo nuestro abuelo de nosotros. Pero nosotros cobramos la revancha, peñi. Petu mongeleiñ iñchiñ kai.

Iñchiñ welu “newentutuaiñ” piñ ta ti, peñi. Fei mu ta fachiantü chi antü meu mülepaimi tüfachi mapu meu. Üngüfkülepai ta fütä mapu ta nietuiñ. Chem meu? Porque iñchiñ newentuiñ. Llükalafiiñ chem, chem winka rume llükalafiiñ. Ni carabinero. “Layaliñ layaiñ. Lanualiñ lalayaiñ. Pero elumutuiñ mapu. A la buena o a la mala, tiene que entregar la tierra.” pipingeiñ ta tüfe, ñi peñi. Fei mu ta mülepatuiñ fachiantü chi antü meu. Miyawimi ta tüfei, gracias ta mi wütrakompan, peñi.

Yetuaimi feichi dungu, “felerkefui nga tüfeichi pu mapuche” piامي.

Tüfeichi Antonio Ñirripil nga pipen, tüfei nga fendelafui nga mapu, tuñmangei no má.” pipingefui. Tüfeichi wentru, kutrankaeyu ta winka. Lonkofel. El rey de la tierra, el pueblo Temulemu Grande pingefui. Tuntukuniemangei.

Entonces iñchiñ petufiñ tüfeichi dungu. Petufiñ chi nütram. Entonces fei meu fachiantü chi antü nietuiñ mapu. Wiyake kona mejor nga feleafuiñ. Porque ya pasamos toa la miseria, toa la pobreza. Harto aguantaiñ ta tüfei. Aguantaiñ ta iñ mongelen, kom füchakeche perdetui, nunca nga coperautulai mapu.

Welu nga chillkatutulu nga pichike wecheke kona, pu malen llükalai. Deya llükalai ta tüfei. Peniefilu am ta chi papel. “Chuchi mu nga fendei chi?” pipiyengei. Ngümentutui winka. Fanten mu elungetuiñ mapu, peñi. Ahí no má, peñi.

## (2) Abuelo que participó en la gurrä de la "Pacificación"

Iñche ta ñi füchake che ta weupiferkefel. Weupifel. Weupife. Mülefui ta Juan de Dios Cadín, pingei, Paillamín, pingefui ta tüfei üi meu.

Aukan ta rupai. “Rupan aukan mu.” pillefui mai. Lumaco, comuna de Lumaco. Fei ta wünen waria tüfei akui, peñi. Kisu engün amurkei ta tüfei, iñche ta ñi laku ta ñi peñi lapui. Pichi Winka pingefui. Lapui. Lapui. Muy valiente de más. Fei mu kisu kangei. Langümngei. Pichi Winka pingefui. Femngechi küpan che iñche.

## (3) Recuerdo de Ciuka, un antiguo que participó en la guerra de la "Pacificación"

Pepan tüfei, pingei kiñe fücha che ka pepan, se llamaba, Ciuka pingefui. Ka pepaeneu ése, mülei aukan mu. Rupai aukan mu fütä che. Tüfa ta katalei tüfa mu ka. Tralkatungefui. Tüfa ta wechodi ta aquí. Tüfa mu kütu. Laafui. (...) Kisu fei

ta kewai lanza mu tüfei engün. Nielai ta arma. Niefule arma apomafui winka, pu. Mapuche eran muy duro. Y sichoniefui winka ta tüfa mu. Kiñe kuwü ta witrampürafui, pu, peñi. Con unos palos .... Elngei ta ti, rüngi. Fün rüngui pingei. Lupümgei la punta así, a veces estaba como cuchilla.

Éste yerlupui winka engün ta, tüfei ta ütrümnentukunufui ka mapu. Niefui newen engün ka, ¿ no? Poderse un hombre con una mano, con un palo. ¿ Cómo? Mülefui newen, ¿ no? Ése eran los primeros mapuches que hubieron tüfachi Chile. Fütake che müna newenngefui. (...)

Femngechi pepan ta fúchake che iñche. Eso tüfei ta nentui ta nütram engün ta, aflai ta ñi nütram engün. Amulei müten ta dungu. Pepai, chumngechi ñi müntumapungen, cheu ni küpafel. Estos viene del norte. Ngürkümtukungepaingün.

#### (4) El gobierno de Kolüpi, que motivó la entrada de los winkas en el territorio mapuche

Ka elngefui ta tüfa mu, peñi. Elngefui ta gobierno mapuche. Kolüpi pingefui.

Tüfeichi mapuche tüfa meu tripafui Remeweiko. De ahí era el lonko, ése. Pero mapuche ñiwallefel, pu. Llükalfui, pu.

Y sabe lo que pasó, ¿ peni? Pichi wedakunui. Se pasó mucho, gobierno. El gobierno mapuche. Fei ta pichi wedakunulu tüfeichi nütram, fei mu ta fei ka nakümkülei winka, pu. Kümekunufule, a lo mejor, petu mandaleafui mapuche. Pero kompalaafui de BíoBio. Küpalaafui, pu, peñi. Hasta ahí tenían límite no más. Como el mapuche amarró el gobierno, y konpai. Ngürkümtukungepai ka amui pa' williche. Los peñi sufrieron mucho en eso kuifi, ¿ no? Ahí mandó el gobierno. Mandó todo. El territorio del pueblo.

#### (5) Matanza que ejecutó Cornelio Saavedra en Puerto Saavedra

Pero mapuche ngullilai, pu, peñi. Y el mapuche nunca aflojó tampoco. Y chumngechi langümngei tüfa engün, peñi. Chumngechi tüfa ta ngürkümtukungei ta lafken. Llegó una parte Puerto Saavedra pingei. Miaukeimi fei püle?

Puerto Saavedra mülei kiñe winkul ahí. ¿ no? Fei mu katapui winkul engün ellos. Ahí no eran capaz los winkas a matarlos. Porque winka llegaron, langümngei. No aflojaron mapuche. Mapuche ilai, pu. (...)

Femngechi tüfeichi Puerto Saavedra, fei mu ngülkünngepuingün éstos. Ya no pudieron ta ñi konal, porque ya lafken katrütueyu. La mar. Ahí fei mu kükañgepui ta pu mapuche. Kükañ pingei ta tüfei.

Fei mu ta pui ta deya, pui ta kom. Y ya como no era am ta rumengelaingün, ta ñi langümngeal engün, wichangei, pu. Wichalngei winka, langümngei “a bala”. Tralkatungeingün.

Tralkatungei, ése se llamaba, el hombre que mató ahí, era un capitán. Cornelio Saavedra pingei. Cornelio Saavedra. Fei mu ta elngei Puerto Saavedra pingetui. Üi elngetui, peñi. Hablando de la historia, pütrilefui dungu, peñi, ¿no?

#### (6) Irrustia, "español" que entregó la tierra de los mapuches a los colonos

[Autor] Ka eimi kimimi kiñeke dungu, por ejemplo, chumngechi ta ñi akun pu español pingechi wentru, antes de chilenos, digamos?

[José] Ìñche fei pi ta ñi fùta laku em, tûfa mu tûfeichi español, Irrustia pingerkefui, fei wemukechepai pi. Era un como chem ése, como ..., chem pingei ama, como juez. Ese juez arreglaban con .... Fei ta tui, elufui ta mapu ta winka. Elufui ta italiano kom akulu. Mapuche ngürküntukumekelu. Porque mapuche kimpapeltulafui. Kimlafui. Kimwinkadungulai kafei.

[Merejilda] Entendelai ta ñi chem pingin. Pülata kimlafi ka. Fei, tunten pülata rume famkunulngei, ayewi. Femngechi amulniei mapu. Kom cerrantukui winka.

#### (7) Amistad que tuvo con don Alonso Clavel

Yo estaba en un fundo. Me cambié el fundo. Estaba aonde el Alonso Claveli pingei winka. Murió mi patron ahora. Ahí ya ese rico automiyaulkefeneu müten, pu. Muy bueno. "Küpalelaen mi kure. " pieneu. "Traígala a su mujer pa'ca, pu. "

Y como ella ya era machi, tenía que tener aliwen. Aliwen, rewe. Entonces tûfeichi rakiduam meu fei ta aliwen pingei, y a veces los gringos no le conviene. Entonces fei mu iñche, si no yo habría, mülepaafun ese fundo con ella.

Después hai tenío muy buenos patrones. Me la hai ganao yo sí, pu. Yo era bueno pa' trabajar, peñi. Ìñche cansakelafun, pu. Era flaco, pero era bueno, lastigúo pa' la pega.

Así que fei mu amulan, pu. Pero el rico me dio de un todo. Me dio de un todo, ayudándome. Porque él sabía que yo era huacho, el rico. Pero me ayuda de la harina cruda pa' rriba. Cachilla, chanchu kom elueneu. Porque yo le hai servíu, pu.

Porque ese gringo queó solo, peñi. Murió los padre, queó solo igual que yo también. Pero yo le cuidé al fundo. Yo le corría con todas las llaves yo. Pero weñelafñ, pu. Weñefuli rico ngeafun, pu. No le robé ni una cosita a mi patrón. Todo, todo, todo, bien cuidado, bien orden su cosa. Yo comía con él, con mi patrón.

Femngechi rupan nga dungu iñche, kutrankawün am wentru iñche.

Y también tomaron buena a mi vieja, kom. Y después kurengi kisu wüne, iñche ka kurengen ka. Murieron los dos patrones, fíjese, iñchuu mongeleyu con mi vieja. Requel Uribe pingefui ñi patrona. Requel Uribe. Fei meu, fei ta muy bueno me tomé un patrón. Nada no tengo que decir.

**(8) Amistad que tuvo con don Rafael Figueroa, ex-propietario del fundo Nancahue**

Y de ahí entré al fundo. (...) Nancahue. El fundo Nancahue, Rafael Figueroa. Ése patron era pan del día conmigo también, pu. Nunca, ninguna gente chemkefui, pero a mí me hacía chem favor ume. Mūna kūmekunukefeneu fūta rico. Y no quería ni por nada, pu. Echacaban en una cosa así, él respondía por mi altiro. Illkukefui, "¡No!" Era abogao. Son siete abogao ése. Los hijos y las hijas. Y los yernos. Son abogados.

Fei mu llallūmūn kullin iñche. Me afirmó con animal. Me dio talaje. El único yo. Lo demás ninguno. Femngelai. Iñche femeneu. Y ella lo querían, "Machicita. La machicita. " Y lo respetaban mucho. No quería que ella anduviera pobre ésta. "¡No!" el rico. "¡No, no! No puede andar pobre ésta. Éste es hija de Dios. " decía el rico. Millonario, pu. Tiene como tres fundos, tenía aquí, pu. Al norte de Panguco. "No puede hacer eso, Cadín, hombre!" pikefeneu. Pero una confianza tan grande el rico ése tenía conmigo, oiga. Regalakefeneu kawellu pa' comer. Me lo regalaba. "Cómete un caballo, hombre!", decía. "Mapuche comer carne'e caballo, ¡hombre! Y me traí unos pocos a mí también, pu, hijo. " "Bien, patrón. " Yo estaba parao. Más limpio que podía. Pa' ganarme con el rico. Femngechi tremūn, peñi.

**(9) Nguillatun que se realizó a petición de don Rafaél**

Fūchake riku ūlmen, gran millonario, tūfa mu ayikei nguillatun. Kuifi reventó un volcán aquí, Chile. Pero fante pūrai ta, kachu ngelai piam nampiyawi kullin. El agua estaba así la ceniza. Pelai pūtokoal kullin, pelai iael kullin, marūlyawi.

Y tripapai ta kiñe fūtra riku. Hablemos de Rafaél Figueroa. "Oye, negro." pieneu. "Mira. Usted tiene machi, hijo", me dijo, "No es fuerza que ser lonko, ¡hombre!" me dijo. "Hágate un nguillatun." Nosotros aunque tengamos mucho millone de peso, iñchiñ ta Dios ta kullilaeiñmu." pi, el rico. "No, no, no. Nosotros no pudimos hacer esa cosa, " dijo. "Pero ustedes, el pueblo mapuche, tiene su cultura conversaal, nguillatual. Y eimūn ngūmeltungeaimūn. Ustede lo van a crear."

Ya. Yo le dije, "Pero con qué ayuda, usted, patrón?" "Yo voy a abrir la bodega. " dijo. "Yepaaimun poroto, kachilla, poñi, fill yepaaimūn. Mudayaimūn. " pi.

Entonces, fei ta, iñchiñ tūfei mu nguillatukeiñ. Y femi chi fūta gringo, rico, y kūpai kisu con adimministraor, campero, como ocho de a caballo. Kūpaingūn a ver la ceremonia. Y el fūta winka, el rico, chumkunuwi ñi tripawe antū, lukunawi, él volvió a su caballo pa'lla. Pero no desmontó. Y lafken mapukunuwi, el dió vuelta a su caballo, y lo puso a lafken mapu. Nentulnieiñ chumpiru, kisu ka nentui ñi chumpiru.



Y ka antü müten mawi, pu, peñi. Se largó el agua. El mismo día fue que lo llovió, la tarde. Pu trafia mawi. Mawi pürümkachi. Pero tal como los canales, así una gota de chem. Amuletui. Y el futa, el rico no se fue. Hasta que se levantó toda la gente ula amutui. ¿ Ve? Ese cree en Dios, ¿ no es cierto? Cree el rico. Tiene fe con el mapuche. Y ahí me dijo, "¿ No vi, hijo?" me dijo. "Hiciste llover. " me dijo. ¿ Ve?

Ese rico me quería mucho a mí. Müna piukekelafenu. Ése me hizo tener animal también. Porque ¿aonde voy a tener? Yo no tenía tierra, pu, peñi. Y ése winka iñche amediatun waka, Alcancé veinte animal. Y él me daba talaje. Dos caballos alcancé yo.

El rico ése tenía una fe muy linda.

#### **(10) Desastre ambiental causado por las compañías forestales (testimonio de doña Merejilda Huentelao, "lonko machi")**

Ka küpai. Wente kompai, doi weyakunupai. Anümkapai, arkümi ko kom. Angküi ko. Ngewelai wau mu. Mülekefui menoko. Mülekefui ta wau. Witrulai ko, rumel witrulai liülen ko. Fishken ko walüg antü mu, are mu. Ngewetulai. Kom pütokoi ta tüfeichi anümka.

Femgechi ta epe ta pewelai lawen che. Rume mülefui lawen kuifi menokontu meu. Rume mülefui wau mu lawen. Karü lawen mülefui. Mamüll. Mülefui ta kachu. Tüfa ta felewelai. Futa ka leftui. I ta tüfachi anümka.

Femgechi felewepuñ ta fau no am chi. Iñchiñ ta femiyawiñ ta tüfa. Felewepun mu lle mai. Anümelngeñ futa bosque. Kompai "forestación". Akui kake winka. Akui ta tüfei. Fei ta anümpai futa, kom ngillapai kiñe fundo, kiñe fütura fundo fantelu, kom anümkafi. Pewelai chem ume chem. Mülekefui ñengüm kuifi. Mülekefui rewür. Ngewetulai. Apümi tüfa.

#### **(11) Abuelo que predijo la recuperación de la tierra quitada**

Pero decían los fuchake che. Pepan iñche como estoy diciendo, hablando de Ciuka. Pepan ta Ciuka, Juan de Dios Cadín Paillamín, ñi abuelo, nütramfe, "Ka antü mongelelmi eimün, petuaimün dungu. Newentutuaimün. Llükalaaimün," pi.

Los viejos sabían que tenían que devolver la tierra. Fuchake che, fütake antiguo weupife. Entonces "eimün, ka antü cobratuaimün ta mün mapu," pi. "Eimün ta mün mapu, peñi," pi. "Chuchi lonko ta fendelai ta mapu em," pi.

## 5. 注

- (1) この儀礼は、彼らが移り住んだばかりの新しい共同体に、マプーチェの聖域のシンボルである「レウエ」という階段状の木彫り、および宗教的な性格を備えたマプーチェ式ホッケー「パリン」の競技場を設置することを目的としていた。
- (2) 「マチ通訳」については、千葉 [1998]: 182-185. 参照。
- (3) 平定以前の時期のイスパノ・クリオーリオ社会とマプーチェ社会の交流については、Villalobos y otros [1982]、Villalobos y otros [1989]、León [1990] 参照。
- (4) 平定の経済的背景については、Pinto Rodríguez [1990] 参照。
- (5) 「平定」の出発点となったアンゴル市の再建のプロセスについては、Leiva [1984]、「平定」過程全般については、Guevara [1998]、Bengoa [1987]: 133-325. が詳しい。
- (6) チョルチョコル地区における「平定」当時の状況に関するマプーチェによる伝承の例としては、千葉 [1999] 参照。
- (7) アラウカニアにおける「恩恵地」の画定、植民、国有地の競売をめぐる共和国側の法制の変遷とその問題点については Aylwin [1996] がよくまとまっている。
- (8) Aylwin [1996]: 20.
- (9) GIA [1984]: 10, Bengoa [1985]: 357.
- (10) Aylwin [1996]: 3.
- (11) CACH [1999]: 4.
- (12) CACH [1999]: 4.
- (13) *La Tercera Internet* [15-marzo-1999].
- (14) Aylwin [1996]: 45-46, 56.
- (15) Bengoa [1985]: 377.
- (16) CACH [1999]: 7.
- (17) *La Tercera Internet* [21-marzo-1999].
- (18) CACH [1999]: 4.
- (19) CACH [1999]: 6, 8, 11, 13.
- (20) CACH [1999]: 6-8.
- (21) Marimán [1998].
- (22) 現時点ではこの「地図」が具体的に何を指しているのか明確なことはわからない。ただ、ホセたちが獲得したフンドの面積である800ヘクタールは、「恩恵地でありながら奪われた土地」58.2ヘクタールよりはるかに大きい。したがって、「平定」当時テムレムの住民の祖先が実際に占有していた「旧領地」の範囲を示す地図ではないかと思われる。
- (23) コリピー族については Guevara [1913]: 16-19. 参照。
- (24) 独立戦争期のマプーチェの動向については、V. Mackenna [1972]、Guevara [1911] が詳しい。
- (25) Bengoa [1985]: 201.
- (26) Guevara [1913]: 20, 27.
- (27) コルネリオ・サアベドラの略歴については、Guevara [1998]: 24-30. 参照。
- (28) Saavedra [1870]: 16, 20.
- (29) Saavedra [1870]: 30.
- (30) バシリオ・ウルティアの略歴については、Guevara [1998]: 143-147. 参照。
- (31) Aylwin [1996]: 28.
- (32) *La Tercera Internet* [15-marzo-1999].
- (33) 「1人の若者」 ルマコ区出身でラ・フロンテーラ大学を卒業したアルカン・ウィルカマンを指す。ウィルカマンはマプーチェ「独立国家」の樹立を目標とする組織「全ての土地の委員会」の指導者である。
- (34) 「葉草が逃げる」 マプーチェの伝統的な世界観によれば、海、川、山、森などの自然界の場所にはそれぞれ特定の神格が司っている。この表現は、植林会社による無差別な植林を嫌い、植物や水を司る神格が他の場所に移動してしまったということを意味する。

## 6. 参考資料

### （１）音声資料

Huentelao, Merejilda y Cadín, José, *Testimonio*, Comunidad de La Unión Temulemu Grande, Comuna de Traiguén, No. 1～3: 10 de agosto de 1999.

### （２）文献資料

Aylwin, José, *Estudio sobre tierras indígenas de la Araucanía: antecedentes histórico-legislativos (1850-1920)*, Serie Documentos No. 3, Instituto de Estudios Indígenas, Universidad de La Frontera, Temuco, 1996.

Bengoa, José, *Historia del pueblo mapuche*, Santiago de Chile, Ediciones Sur, 1987, 2a edición.

Bengoa, J. y Valenzuela, E., *Economía Mapuche. Pobreza y subsistencia en la sociedad mapuche contemporánea*, Santiago de Chile, PAS, 1984.

CACH (Colegio de Antropólogo de Chile A. G.), *Informe colegiado de difusión pública :Comunidad Temulemu*, Santiago de Chile, 1999.

千葉泉, 「マプーチェ歴史伝承、ラウタロ区（１）ーフアン・コネヘーロの語る「征服」と「平定」ー」、*Estudios Hispánicos*, No22. 所収、大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室、1997年、95-112頁。

千葉泉, 『馬に乗ったマプーチェの神々ーチリ先住民文化の変遷ー』、大阪外国語大学学術研究双書19号、1998年。

千葉泉, 「マプーチェ歴史伝承、 Cholchol地区（１）ーロサ・バーラ・カユルの語る「平定」ー」、『大阪外国語大学論集』第21号所載1999年、193-215頁。

千葉泉, 「マプーチェ歴史伝承：ラウタロ区（２）ーフランシスコ・ミジャレンの語る「征服」と「平定」ー」 *Estudios Hispánicos*, No25. 所収、大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室、2000年、101-122頁。

GIA, *El pueblo mapuche : hoy*, cuadernillo de información agraria, marzo-84, Santiago de Chile, 1984.

Guevara, Tomás, "Los Araucanos en la revolución de la Independencia", en *Anales de la Universidad*, Imprenta Cervantes, 1911, pp. 217-641.

Guevara, Tomás, *Las últimas familias araucanas i costumbres araucanas*, Santiago de Chile, Imprenta Litografía i Eucuaernación "Barcelona", 1913.

Guevara, Tomás, *Ocupación de la Araucanía*, Santiago de Chile, Andujar, 1998.

Leiva, Arturo, *El primer avance a la Araucanía:Angol 1862*, Ediciones Universidad de La Frontera, Temuco, 1987.

Mackenna, Benjamín Vicuña, *Guerra a muerte*, Editorial Francisco de Aguirre, Buenos Aires, 1972, 3ª edición.

Marimán, José A., *Lumaco y el Movimiento Mapuche*, Denver, 1998.

Pinto Rodríguez, Jorge, "La Ocupación de la Araucanía en el Siglo XIX, ¿ Solución a una Crisis del Modelo Exportador Chileno?", en *Nütram*, Año VI, Núm. 3 de 1990, Rehue, Santiago de Chile, pp. 7-16.

Saavedra. Cornelio, *Documentos relativos a la Ocupación de Arauco*, Santiago de Chile, Imprenta de la Libertad, 1870.

*Tercera Internet, La*, Consorcio Periodístico de Chile, COPESA S. A., Santiago de Chile.

(2000.4.14受理)